ごみ問題発生背景

栗 原 四 郎*

日本の高度経済成長の進展とともに、産業から、家庭から排出されるごみの量は超高度増大の一途をたどり、廃棄物処理不能寸前の事態になっている。このような状態になった大きな原因は、物をつくるという積極的なことと異なり、ごみを含むすべての廃棄物を処理することはとく消極的になりがちで、これが今日巨大な量のごみの発生となり、その解決策が後手後手となってしまった結果である。もはや私たちは自分の出したごみで、自家中毒に陥りそうになっている。なんらかの抜本的な方策の樹立をできるだけすみやかに確立しないと、真の自家中毒死に至るであろう。ここにごみ問題発生背景について私なりに考察してみた。

まず第1にごみと住民の関係である。ごみは人間の生活による残留物で、かつ不要物である。このごみを生活圏からできるだけすみやかに排除するのがごみ処理作業である。それゆえ、市町村も住民も生活環境からごみの姿が完全になくなることが、健全なごみ処理作業であると考え、かつ信じていたのである。事実この姿は、五、六年前まではよかった。それゆえ国の方針もごみ処理体系は収集、運搬、処理という3部門の一連作業という考えであり、市町村もこの方針を基本にして事業を実施している。それゆえ市町村のごみ処理作業計画は「ごみと名のつくものは出しなさい。処理はしてあげます」ということで掌に当たっているのである。住民としては定められた日にごみを出せば生活環境は清潔に保持されてきたのである。

このような処理態勢はごみの増量を促し、大量消費時代の到来となり、これにより利潤を得た企業者にとって、この方式はまことにありがたい存在であったに違いない。また住民に対してはこの方法はあまりにも過保護であったため、自然とごみ排出者の自覚が欠けてきた。ごみ処理の過程中には必ず排出者が存在するということである。ごみ処理は市町村のみでなく、ごみ排出者自身もその一翼をになっていることである。ごみ処理は排出者の貯蔵よりはじまり、収集、運搬という生活環境よりの排除となり、破碎、圧縮、焼却などの処理を経て処分されるものである。収集から処理までの過程が衛生的に、経済的に実施できるか否かは、かかって排出者のごみ貯蔵の良否にかかっている。この収集されたごみは焼却か埋立によって処理、処分されなければならない。この処理場は東京都のような過密都市では、ごみ排出者の周辺に求めざるをえないことになる。都市の住民は一樣に排除による快適な生活環境が得られるが、処理場周辺の住民は逆に「押しつけられる」という被害者感情が生ずる。この感情が処理場設置反対として現われ、今日のごみ問題発生導火線となって

* Shiro KURIHARA 東京都清掃研究所 (124 東京都葛飾区小管町 1-4-1) 所長

いる。

次に問題点となった原因は処理技術の立遅れをあげることができる。これには次の三つの事柄が考えられる。その一つはごみの環境汚染速度の遅いことである。し尿や煙のようにごみは排出と同時に環境を汚染しない。そのため一時処理が遅れてもよからうという考えが処理技術の立遅れをもたらしした。これが「たかがごみ」という観念を排出者も市町村も持っていたことは否定できない。道路や河川への不法投棄や市町村のごみの埋立処理方式への依存度の高いのが顕著な例である。埋立方式は土壌中のバクテリアの働きによる高度の生物化学的操作を必要とするが、今の埋立は不法投棄に近い状態で、衛生埋立とはほど遠いのも「たかがごみ」の観念からくるものである。その二つは質、量の把握の困難性があげられる。し尿は1人1日あたり約1.2lの排出量で、これに将来推定人口をかければ概略の処理施設の規模は算出できる。また質においても全国的には有意の差は認められないので、一定の規格による処理施設は可能で下水道処理がよい例である。ところが、ごみは「ごみとは社会通念上、占有者が生活環境に支障ありと認めたときに、占有の意志を破棄して投棄した固体廃物」と定義づけられるごとく、排出者個人の考えで投棄するうえに、経済状態、季節、天候、はては個人所得まで影響する。さらに「消費は美德」、「使い捨て」の思想はごみの質、量をより変化させている。このような性状を有するごみ処理に対する研究は複雑かつ困難で、し尿処理技術に比較して数段立遅れている。三つめはごみの発生場所における定着性をあげることができる。ごみの場所的移動には必ず人手によらなければならないという宿命を有している。ごみをはじめ固体廃物は発生場所に定着性を有している。この定着性を有するごみの移動は、好むと好まざるにかかわらず、人為的操作を必要とする。この輸送は現在自動運搬しかない。ごみの移動がもし下水道管のようにごみ道管ともいべき移動方法であるならば、江東区の事態も起こらなかったのではなかろうか。

要するに以上のように考えてみると、今日ごみ問題は起こるべくして起きた感じが深い。ごみ問題解決には市町村当局ばかりでなく、国民一人一人がごみに対する考え方を改めなくてはならない。ごみを永久にごみと考えている限り(ごみの原料化)「たかがごみ」という観念をもつ限り、被害者であると同時に加害者であるという観念が浸透しない限り、恩恵感情と被害者感情が相殺されない限り、ごみ問題は永久に消滅することはありえないのではなかろうか。